

健康診断における婦人科検診

～現代女性に必要な

「経腔超音波検査」を知る～

若い世代に多い子宮頸がんをはじめ、働き盛りの世代に多い子宮筋腫や子宮内膜症など、女性には特有の疾患があり、女性に特化した健康診断が必要である。講演①では、株式会社ファムメディコの佐々木彩華氏に、働く女性の健康問題について、講演②では、産婦人科医の上坊敏子先生から「現代女性の婦人科疾患と経腔超音波検査」のお話をいただき、働く女性の疾患リスクや代表的な婦人科疾患、婦人科診療に欠かせない経腔超音波検査について、学びを深めた。



2021.6.22 クレアージュ東京にて

【講演①】働く女性の健康問題

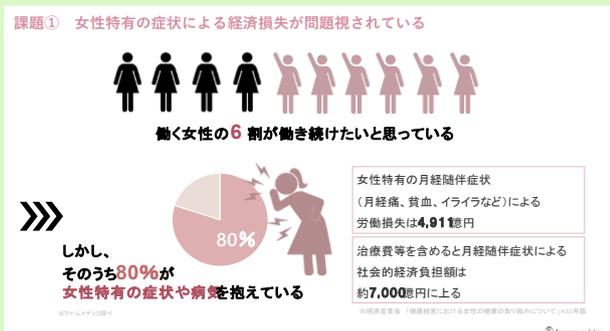
佐々木 彩華氏 (株式会社ファムメディコ 取締役)



◆女性特有の疾患と経済損失

内閣府、経済産業省をはじめ多方面から「働く女性の健康課題」が注目されている。働く女性の約6割は働き続けたいと思っているが、我々の調査では女性の8割が女性特有の症状や病気を抱えていると回答（図1）。女性特有の月経随伴症状による社会経済的負担は治療費を含めると7000億円にも上ると試算されている。

【図1】



◆経腔超音波検査で婦人科疾患の早期発見を

女性特有の症状や疾患が社会的な問題になる一方で、女性自身も病気について正しい知識を持っていないという課題がある。我々の調査によると、月経随伴症状を抱える6割以上の方が生活に支障が出ているとしながらも、9割はいつも通りに仕事をしていると回答。医学的には、月経困難症や重度の月経痛がある場合、2人に1人は何らかの疾患が潜んでいることが明らかになっているにもかかわらず、婦人科を受診した人は11%にとどまっている。

20代～40代の女性に多くみられる子宮筋腫や子宮内膜症は放置すると不妊症になったり、卵巣嚢腫では卵巣がんになるおそれもある。一方で、婦人科疾患の早期発見・治療に有用な経腔超音波検査については6割の女性が「知らない」と回答した。また経腔超音波検査は、ほとんどの企業で補助の対象外になっている。

婦人科疾患関連のセミナーで正しい知識を伝えたあとに実施したアンケートでは、9割の女性が経腔超音波検査を受けたいと回答している。

これらの現状を踏まえて、企業や健保組合の皆様と共に経腔超音波検査の理解促進と受診機会の創出を図っていきたいと考える。

【講演②】現代女性の婦人科疾患と経腔超音波検査

上坊 敏子 先生

(クレアージュ東京 レディースドッククリニック婦人科顧問

JCHO相模野病院婦人科腫瘍センター顧問)



妊娠していないときの子宮の大きさは鶏の卵程度で、80グラムほど。卵巣はさらに小さくてせいぜい10グラム程度の臓器である。性成熟期（20代～40代）の女性を襲う代表的な婦人科疾患には以下のものがある。

◆子宮頸がん

ヒトパピローマウイルス（HPV）が原因で発症する。発がん過程がよくわかっており、検診の手段も確立、予防ワクチンもあるなど、子宮頸がんは人間の体の中で唯一予防可能ながんだといえる。患者数は20代後半から増加し、30代～40代に大きなピークがある。妊娠・出産にあたる年齢と重なるので「マザーキラー」とも呼ばれている。

子宮頸がんが進行すると最初に出てくる症状が不正出血（特に性交後の出血）である。進行すれば悪臭を伴うおりものや腹部、腰、足などの痛み、尿が出ないといった症状も出てくる。

早期がんの大部分は無症状で、がんがかなり進行するまで症状がない。自覚症状がないときに受ける検診は、子宮頸がんの早期発見に非常に大きな威力を発揮する。

◆子宮筋腫

子宮にできる良性の腫瘍で、悪性化の心配はない。35歳以上の女性の3人に1人に発生するといわれ、閉経すると小さくなるのが特徴である。できる場所によって漿膜下筋腫、筋層内筋腫、粘膜下筋腫に大別される（図2）。

【図2】

子宮筋腫とは・・・

- 子宮の筋肉にできる良性の腫瘍
- 35歳以上の女性の3人に1人にできる
- 閉経すれば小さくなる
- 悪性化の心配はない

